

研究報告

# 変化の時代における保育者養成教育のあり方

——特に学外実習指導における効果的な教育方法の検討——

A Discussion of Effective Education Methods for  
Training Guidance in the Teaching Practice

中西利恵・曲田映世  
藤本麻子・山口美智子  
岩口摂子・木村久男  
細川速見・山本和明  
渡部美穂子・川中美津子  
高岡昌子

キーワード 保育者養成教育、教育方法、実習指導、協働性

## 1. 問題の所在と研究の目的

平成23年度学校基本調査では、大学・短大への進学率は56.7%、高専・専門学校に入学した数も含めると約8割となる。定員割れの大学・短大の数も増加し、「全入時代」という表現が使われるようになった。ユニバーサル化を迎えた高等教育施設において、入学してくる学生の基礎学力不足や学習意欲の低下、不登校などの状態はもはや常態化しているという認識のもと、教育の質の向上をいかに図るかが課題となっている。特に、保育者養成教育においては、社会から求められる「保育」に応ずることができる保育者の養成が求められており、時代の変化に応じて求められる新たな保育者の専門性を

見据えた養成教育が課題であることは自明である。金田ら(2011)が指摘するように、引き受けた(入学させた)以上は養成校教員の責任であり、学生の実態に合わせた教育の方法を教員自身が探求していくことが求められ、それは要求水準を単に低くすればよいというものではない。授業のあり方の工夫やそれに向かう実効性の高いFDが必要であろう。

一方、全国保育士養成協議会専門委員会の平成23年度課題研究で実施された保育士養成施設及び教員調査結果(2012)によると、保育士養成校の実態としては、各教員の専門分野と保育者養成をつなげる方法や内容が不十分なため、教員間の温度差や帰属意識の希薄性を生んだり、結果的に各教員の「やりがい」や「困難さ」の感じ方の違いにつながっているようすが

みられた。教員間に生じている溝や温度差を解消し協働に向かうためにも、自分たちが帰属する学部・学科の行っている養成教育そのものを対象とした研究の構築が望まれると考察されている。このような保育者養成現場の状況においては、大学での4年間の養成課程で教員が何を教えたかではなく、個々の学生が何を学び課題としているかを的確にとらえるために、どの科目を履修し何単位を取得したかという履歴も大切であるが、どこに向かってどのように学び次の課題は何かを学生自身も教員も自覚していくことが大切であると考えらる。

以上のような背景をふまえ、子ども発達学科においても、引き受けた一人一人の学生の学びの実態に応じた教育のあり方を模索し続けている。各教員個人の努力や取り組みの工夫を行っているものの、それには限界があり、養成にかかわる教職員全体による連携や科目間の有機的な結びつきと効果の創出が課題となる。大学設置基準改正（平成23年4月1日施行）においても「大学は、(中略)社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」と示されており、教員間だけでなく職員も含めた組織間の連携や協働が求められている。

本研究では、子ども発達学科における取り組みとして、入学する学生の変貌に対応し、一人一人の学生の学びの実態に応じた養成教育について「協働」をキーワードに検討し、特に、4年間通して実施される学外実習の指導を中心に効果的な教育方法のあり方について研究することを目的とする。

## 2. 本学の実習指導体制

相愛大学人間発達学部子ども発達学科では、保育士資格・幼稚園教諭一種免許・小学校教諭一種免許の3つの資格・免許を同時に取得できる。資格・免許取得のための学外実習科目は、必修科目以外に独自科目も含め1回生から4年間通して開講されている。各種実習の実施は、学科専任教員の中の担当教員が責任を持ち、実習指導室助手ら（保育・教育実習指導室、小学校教育実習指導室の2つの実習指導室と合同研究室があり、それぞれの部署に助手が常駐）とともにしている。実習指導の事前・事後も含めた学科の協働体制を図るために、学科会議と実習担当者会議を隔週で開催し、一人一人の学生の学びの実態について学科の全教職員間でいいいな情報交換（報告・連絡・相談等）を行い、情報の共有化を行っている。

## 3. 実習指導と学生の学びの実態把握

一人一人の学生の实態に合わせた実習指導の実施をめざし、学生の学びの実態について具体的な情報の共有を図る工夫を行っている。協働による実習指導体制の効果をも高めるため、実習指導の一貫性や連続性、指導の見通し、実習評価の公正さ・厳格さの質を高めることが必要である。そこで、実習の事前から事後までを通した一連の指導とその結果から、個々の学生の取り組み状況が把握できるようなチェックリスト(図1)を作成している。

さらに、学生が実習の事前・事後を通して、どのような状況や理由により問題が生じ対応したかなどについて、詳細に記録(図2)を作成し、全教職員が会議で共有できるように試みて

㊦ ○○年度「保育所実習」事前事後指導／学生の取り組み状況

NO	学籍番号	氏名	保育所園名	実習日程の確認	事前訪問報告	検便申込み	直前指導①	直前指導②	直前指導の補講	訪問指導教員へのお礼状	実習中の欠席報告	実習記録提出遅れ	集計
10	****	●●●●	▲▲▲▲										0
11	****	●●●●	▲▲▲▲										0
12	****	●●●●	▲▲▲▲								X		1
13	****	●●●●	▲▲▲▲										0
14	****	●●●●	▲▲▲▲		X		X	X	X	X			5
15	****	●●●●	▲▲▲▲										0
16	****	●●●●	▲▲▲▲										0
17	****	●●●●	▲▲▲▲										0
18	****	●●●●	▲▲▲▲	X	X								2

図1 個々の学生の取り組み状況把握用チェックリスト

㊦ ○○○○年度 保育所実習 実習トラブル一覧

NO	カテゴリ	日付	該当学生	内容	詳細、対応	対応者
1	事前指導	7/15~8/2にかけて	●●●●	事前指導のガイダンスを何度も欠席したり事前の準備を前日まで完了出来なかった為、特別講義が出たが、未提出であった	本人に連絡をし、早急に提出するよう指示(由田) 提出した後にご連絡いただいた(中西先生)	●●先生 ●●●●
2	実習記録	8月6日	●●●●	実習記録を無くした	自宅をしっかりと探し、翌日に再度来るように伝え、事前訪問に持参する書類を全て持ってくるよう指示 翌日、実習記録が見つかったと報告にきた	●●●●
3	実習日程変更	8月11日	●●●●	学生より園児が病欠日からの実習となり、実習日程が変更になったと報告があった	保育実習ご担当の先生と訪問指導ご担当の先生に連絡した	●●
4	実習欠席	8月23日	●●●●	福川先生がアポイントの連絡を入れた際、欠席していることがわかった (欠席時に大学への連絡なし)	本人に連絡し、現状確認 実習園へお詫びと延長のお願い(山口先生) (補正・再度も連絡したが連絡取れず、自宅に連絡をしてもいないと言われてしまったり、連絡・報告を必ずするように指示していましたが、ちゃんと連絡・報告せず、いい加減だった)	●●先生 ●●●●
5	個人履歴紛失	8月30日	●●●●	個人履歴を紛失した為、新しいものが欲しいと来園した	新しい物を渡した	●●
6	実習セット紛失	9月1日	●●●●	実習袋より出席票などはこちらに置いて置いておいてほしいものでしょうかと問い合わせがあった	お詫びをし、届けられ早急に送付する旨を伝える 本人に現状確認、全て自宅にあり、翌日に持参するように指示した	●●
7	実習欠席	9月1日	●●●●	8/27より欠席し、欠席していたと連絡があった (欠席時に大学への連絡なし)	現状確認をすると、8/27、28、30、9/1と欠席していたが、9/1まで大学には連絡をしておらず、自らの現状も把握できておらず、再度、病院へ行き、調べてもらうようになり、病院の結果がわかったら報告するように指示した(中西先生) 病院での診断結果は風邪とのこと	●●先生 ●●●●
	実習欠席	9月2日	●●●●	実習をするつもりで出勤したが、「喉が出て声も出れなくなり、うつすかもしれないが実習をしてもいいかと担当の先生に聞き、今日は無理せず休むように指導されたので、帰ってきたと連絡があった	現状確認 実習園へお詫びと本人の意思により延長のお願いをした(中西先生)	●●先生 ●●●●

図2 学生の实習事前・事後を通して発生したトラブルの記録

いる。また、実習指導にかかわる事項については、同時進行するあらゆる学外実習を対象に学生の取り組みの実態を取りまとめた資料を作成している。このように、学生が取得をめざす資格・免許にかかる学修状況を可視化し、同じ情報を全教職員が共有する体制の構築をめざしている。実習指導を中心に、学生一人一人の学び

の実態をタイムリーかつついでいねいに把握した上で、それぞれの教職員が個々の教育活動にも反映させることにより、今求められている4年間を通した多様な学生の一人一人の学びに向き合った教育実践の質をより高めることにつながると考える。

#### 4. 効果的な個別事後指導方法の検討

以上のように、本学科では4年間を通じた実習指導において、一人一人の学生の実態に応じた教育方法の工夫として、学生の一連の取り組み状況を可視化した情報を全教職員間で共有化を図り、個々の教育活動に反映させる取り組みを行っている。さらに、多様な学生の一人一人の学びに向き合った教育実践の質を高めるため、学外実習指導において効果的な個別事後指導をめざした教育方法の実践を試みている。

#### 5. 学生による実習後の 「自己評価」の活用

実習指導における効果的な教育方法を探るため、実習後の「自己評価」を中心に検討し、指導法の開発を研究してきた。ここでいう自己評価とは、実習現場からの評価票と同様の項目を、実習終了後に実習生自身に評価させたものである。実習後の自己評価は、学生自身のふりかえりの機会となるとともに、現場における評価との比較を通して事前・事後指導における有用な指導法の改善に活用し、あらたな教育方法を開発できる可能性をもつ。

なお、自己評価の実施にあたっては、調査の目的および内容について口頭にて説明をし、自己評価結果は単位認定がともなう実習評価に影響しないこと、不利益は生じないので率直に評価すること、個人名が特定されないこと、得られた結果は教育活動に還元し、研究紀要などで公開することを説明した上で実施した。

また、評価は、本来実習の目的と関連づけて客観的になされるものであるが、それぞれの実習園の評価基準にはそれぞれの実習園の理念や

方針が反映され、結果として実習園間格差が存在することは否めないだろう。ただし、ここでは実習園間格差を問題にするのではない。現場評価と自己評価の全体的な関係を把握し、さらに個々の学生のズレの傾向について検討することによって、目の前の学生を対象とした実習指導として効果的な教育方法の開発への手がかりを探ることを目的としている。

#### 6. 自己評価と現場評価の比較

4年間の教育課程において一番最初に体験する保育所実習（保育所での1回目の実習）を対象に、3年分の学生（172名）の自己評価と実習園の現場評価を比較し、両者の評価のズレ方に着目し検討した。その結果、ズレ方には5つのタイプが明らかになった。タイプA（自己評価>現場評価：2点差以上）、タイプB（自己評価>現場評価：1点差）、タイプC（自己評価=現場評価）、タイプD（現場評価>自己評価：1点差）、タイプE（現場評価>自己評価：2点差以上）である。図3に、評価項目ごとのズレ方の5つのタイプ別割合を示した。なお、本学の評価票項目は「実習態度」「研究態度」「保育計画」「保育技術」「保育資質」「総合評価」の6種類で、1点（もっとも低い評価）～5点（もっとも高い評価）の5段階で得点化したものを評価点としている。

保育所実習評価項目ごとの傾向としては、いずれの評価項目もおおむね3分の1がタイプCの自己評価と現場評価が一致型であった。ズレが1点差のタイプBとタイプDは、いずれの評価項目においてもほぼ50%前後であった。残りがもっともズレの度合いが大きいタイプAとタイプEであった。実習指導の観点からみて、自己評価と現場評価の差が2点以上ある

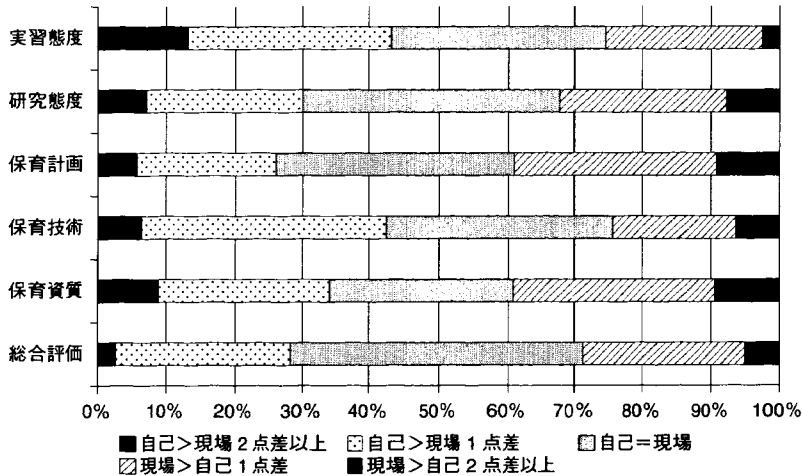


図3 現場評価と自己評価のズレ方のタイプ別割合

大きなズレ方をした学生の傾向を検討したところ、自己評価を高くつける傾向にあるか、自己評価を低くつける傾向にあるかの正反対の2つのパターンに分かれることが明らかになった。

学生の自己評価と保育現場評価の比較検討を活用した実習指導方法に関する研究の詳細については、中西ら（2010, 2011, 2012）の一連の報告を参照されたい。

### 7. 効果的な事前・事後指導をめざして

事前・事後指導については、従来からの方法として一斉指導を実施している。さらに、初めの実習である保育所実習の事後指導としては、後に続く実習の事前指導も兼ね全教員体制で個別事後指導も実施している。自己評価と現場評価のズレ方を考慮することによって、より効果的な個別事後指導の可能性が考えられる。少なくとも、自己評価をかなり高くつけるタイプとかなり低くつけるタイプは全く別の特性もしくは問題点を持っていると推測されるので、同じような指導内容ではどちらか一方に対しては逆効果になる可能性もある。例えば、自己評

価をかなり高くつけるタイプの学生は「自分ではできている」と判断しているので、現場評価とのズレの原因である「できていないこと」「できなかったこと」に気づくためにどのような教育方法が有効であるかを検討しなければならない。また、「自己評価をかなり低くつけるタイプ」は実際は現場から良い評価を得ているにもかかわらず、自分では「できていない」と判断しているので、そのような学生には具体的な課題を見つけ一生懸命取り組むように指導する以前の問題として、自己効力感を高められるような働きかけが必要であろう。

### 8. 新たな個別事後指導方法の 実践と指導内容の分析

そこで、自己評価と現場評価のズレ（全体的傾向を示した図表）と実習園からの評価票の所見からみえる傾向に関する可視化した情報を、全教員で共通理解を図った上で個別事後指導を実施する教育方法を実践した。可視化した情報例の一つを図4に示す。この分析対象は、2011（平成23）年度に保育所実習を履修した学生51

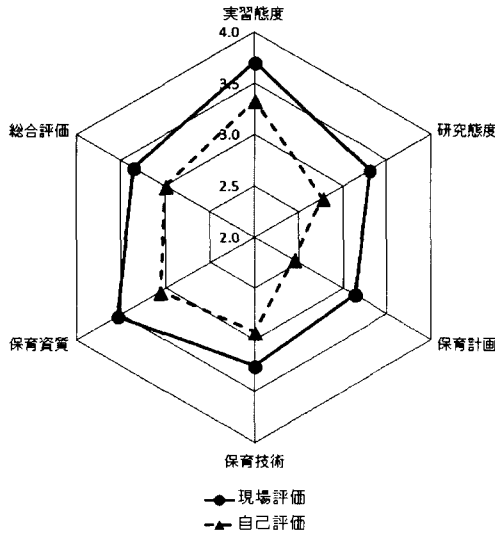


図4 保育所実習における評価項目別の自己評価と現場評価の平均点

名中、無回答項目のある学生を省いた48名である。この情報から、学生は相対的に自己評価を低く採点していることがわかる。2006(平成18)年度の履修学生から継続して分析している結果からみると、おおむね自己評価の方が現場評価より低い傾向にある。また、評価項目別で見ると、「保育計画」は自己評価を低くつける傾向が例年顕著であり、学生がもともと持っている計画を立案する苦手意識や、初めての実習であることなどが反映されていると推測される。もちろん、評価項目や学年によって自己評価と現場評価の評価得点の傾向は変化する。が、両者がズレてしまうことは起こりうることで、大事なことはその後の学習でいかにズレに気づかせ、ズレ方(ズレの質と量)にそくして意識化かつ効果的に改善が図られるようにするかが実習指導として求められる。

新たな方法で各教員が実施した個別事後指導の内容については、①学生が課題として認識している内容、②指導のポイント(示唆内容・伝えた内容)について報告書を作成した。ここで

は、提出された報告書の分析(25名分を対象)を通して、個々の学生の実態に対応した課題の抽出状況や指導の内容に関する傾向を検討する。報告書の内容についてテキスト分析(SPSS Text Analytics Surveys 使用)を行った。出現頻度の高いキーワードを抽出し、おおまかに分類して検討した。

多く使用されていたキーワードは、評価(11)、保育士(8)、課題(7)、実習記録(6)、自己評価(5)、声かけ(5)、研究態度(5)であり、その他にも積極的、観察、具体的など現場評価と自己評価の比較を参考に、特別な用語が使用されていないものの、学生の具体的な課題に展開させ指導されているようすがうかがわれた。

さらに、教員の報告書から大きなズレを示した学生への具体的な指導内容例を以下に示す。指導内容例から、各教員が学生のズレの実態に合わせ指導を展開しているようすがわかる。  
○タイプE(現場評価>自己評価:2点差以上)の学生への指導のポイント

研究態度・実習記録の評価が高いので、自信を持って2回目に望むように伝えた。記録は睡眠時間を削ってがんばったとのこと。また、保育士や子どもの観察も細かくできており、穏やかに落ち着いた実習態度にも好印象をもたれていたことも伝えておいた。本人も課題として意識している「子どもの中に積極的に入り関わりをもつ」ことは、指導保育士も課題として挙げていたので、自分の問題意識に自信を持って実習に臨むよう伝えた。

○タイプA(自己評価>現場評価:2点差以上)の学生への指導のポイント

かなり自己評価が高くなっており、特に実習態度や資質については5点満点を付けているが、ほんとうにそのように考えているのかをさりげなく質問。少々調子によって評価したとのこと。課題は

具体的にあげること（自分がどうゆうふう活動しようとしているのか）。過信しないこと。

以上のように、変化の時代における保育者養成教育のあり方を検討するにあたり、協働性を重視し、特に学外実習指導における効果的な教育方法の開発と実践、検証を行った。今後も実践と教育効果についての検証を繰り返し、多様な学生の一人一人の学びに向き合った教育実践の質を高めるため、効果的な実習指導方法を探り、保育者養成教育の質の向上をめざしたい。

#### 参考・引用文献

- 1) 金田利子・音田忠男 2011 保育士養成課程における発達と教育の視点から見たFDの課題, 保育士養成教育 29, pp.93-94.
- 2) 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会 2012「指定保育士養成施設教員の実態に関する調査」報告書Ⅱ－調査結果からの展開－, 保育士養成資料集第56号
- 3) 福田真奈 2011 保育所実習生における園評価と自己評価の関係について, 日本乳幼児教育学会第21回大会研究発表論文集
- 4) 加藤孝士・浜崎隆司・寺蘭さおり・森野美央 2008 保育専攻短大生の保育者効力感と実習評価の関係－実習前の保育者効力感の高低を要因として－, 応用教育心理学研究, 25-1, pp.15-23.
- 5) 中西利恵・大森雅人 2004 保育実習における事前・事後指導のあり方－過去3年間における学生の自己評価と保育現場の評価との比較を通して－ 湊川短期大学紀要, 39, pp.47-53.
- 6) 中西利恵・大森雅人・益田圭・曲田映世・高濱麻貴 2010 実習指導の効果を高める教育方法の研究－保育所実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から－, 相愛大学人間発達研究, 1, pp.31-38.
- 7) 中西利恵・大森雅人・曲田映世・高濱麻貴 2011 実習指導の効果を高める教育方法の研究(その2)－学生の自己評価と現場評価のズレを活用した事前・事後指導のあり方－, 相愛大学人間発達研究, 2, pp.47-54.
- 8) 中西利恵・大森雅人・曲田映世・高岡昌子・山口美智子 2012 実習指導の効果を高める教育方法の研究(その3)－幼稚園・保育所での実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から－, 相愛大学研究論集第28巻, pp.167-180.
- 9) 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会編著 2002 効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅰ－保育実習の実態調査から－, 保育士養成資料集, 36 社団法人全国保育士養成協議会.